



東京総合指令室

"究極の安全"をめざして

「お客さまの死傷事故ゼロ」という具体的目標を掲げ、社員・安全設備・ルールの三位一体で"究極の安全"をめざしています。

毎年、全投資額の4割強を安全投資に振り向け、安全を追求する風土の構築に取り組んできた結果、鉄道運転事故は会社発足時と比較して4分の1に減少しました。

しかしながら、安全に「絶対」や「完璧」はありません。「ルールどおりにしていれば絶対大丈夫」「これで完璧だ」と思った瞬間、安全の土壌は崩れます。私たちが"絶対の安全"ではなく"究極の安全"をめざすのはそのためです。

3つの側面からのアプローチ

"究極の安全"を目指すにあたっては、3つの側面からのアプローチが必要と考えています。1つは、装置やシステムによる安全の追求です。人間が扱う以上、いくら正確を期しても完璧はありません。したがってミスが許されない安全の根幹に関わる部分は、「ATC(自動列車制御装置)」や「ATS(自動列車停止装置)」などの装置の導入を進めてきました。また、仮に何らかのミスや故障が発生した際には列車を止めたり、安全側に働くように設計する「フェイルセーフ」の思想をできる限り取り入れています。

2つ目としては、ミスの入りこむ余地を絶つための組織やルールづくりです。ルールは極力シンプル化し、全社員でそれを厳格

JR東日本の
3つの視点
1

【安全】

めざすは「安全」と、その先の「安心」



に守ることに取り組んでいますが、それでも不測の事態が発生したときには、「安全をすべてに優先させる」という優先順位を明確化することで、影響を最小限とします。ただし、安全を十分確認しつつ、できるだけ早く復旧させて、お客さまに正常な輸送サービスを提供するための施策も同時に進めています。

また、事故になる手前の「事故の“芽”」を未然に摘み取るため、そうした情報を全員が共有する体制を築くことも重要です。これまで、安全意識を高める風土づくりをめざして、各職場で「チャレンジ・セイフティ運動」などを通じ、1つ1つ事故の“芽”をつぶすことに地道に取り組んできました。

事故から"何を学ぶ"か？

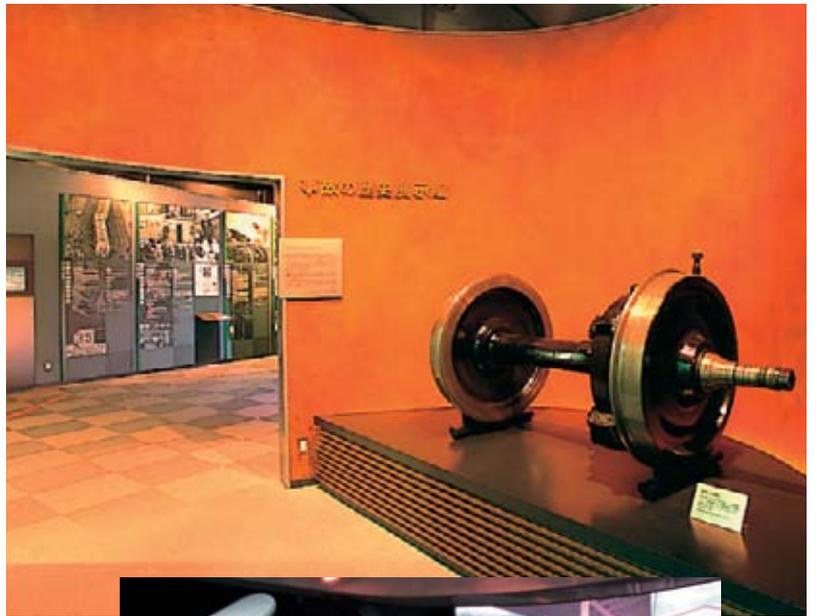
3つ目は人材の育成です。教育や仕事を通じた人づくりは最大の安全対策と考えています。当事者意識を持って過去の事故から学び、教訓を自身の知とすることができるよう、2002年10月に「事故の歴史展示館」を設置しました。安全確保のために設けられた現在の設備やルールが、それぞれ過去の事故の経験や反省に基づいてできていることを実際に見て感じ、社員間で議論できる環境としています。

私たち鉄道事業者は常に安全性の向上に努める責務があります。これからも全社員一丸となって"究極の安全"に向けて取り組み、安全に対するDNAのさらなる進化をめざしていきます。

JR東日本総合研修センターの
訓練線を使用した訓練



各職場で安全に関する議論を展開し「事故の“芽”」を
摘み取る「チャレンジ・セイフティ運動」



実車感覚で事故予防訓練を行う「新幹線運転士訓練用シミュレータ」

信頼されるJR東日本をめざして～私たちの取り組み



先輩から私、そして後輩へ。
“安全のDNA”を伝えたい。

盛岡運輸区
運転士 大光 一馬

平常時と異常時、この2つを常に念頭においています。ふだんは「しっかりと急がずに確認すること。指による確認、声による喚呼をはじめ、先輩運転士が築いてきた「基本動作」に忠実であることを意識して自らへ課しています。

一方、異常時は、「お客様の安全と安心」が最優先となります。輸送指令に現場の状況を伝えたり、対応策を提案するなど、何が最善かを自発的・自律的に考え行動するように心掛けています。

どのような場合でも、安全を守るのは個人だけではありません。先輩から私へ、そして後輩たちへとノウハウを確実に伝承していかなければなりません。そのためにも、訓練などで上司・先輩の経験から学び、判断力の向上に努めるとともに、失敗談さえも皆で話し合える雰囲気づくりを大切にし、職場での「チャレンジ・セイフティ運動」に積極的に参加しています。



ルールの成り立ちを知り、
その本質を理解する。

仙台保線技術センター
施設技術主任 佐久間 浩二

線路を保守・管理する「保線」は、お客様の命を預かる重責を担っています。この自覚を一人ひとりが抱き、実践へと結びつけるべく私が志していることが、主に3つあります。

まず第一に、ルールの遵守。各ルールには明確な根拠があり、事故を教訓に生まれた条項も少なくありません。この成り立ちを知り、ルールの本質を理解する一助として啓発パンフレットを作成し、線路に近接した場所で工事を行う方々にも配布、安全性の確保を呼びかけています。

第二に、情報共有。全員参加の会議を定例で開催し、各々が体験した事故やヒヤリ・ハットについて議論しています。皆で発言し考えるプロセスから、気がつくことも多いです。

そして第三が、訓練。日々の故障や大地震などを想定し、いずれのケースでもお客様の安全確保と迅速な復旧ができるよう、日常的なシミュレーション訓練を行っています。